

“kq”

佐々木すーじん

#### ◆音楽の譜面で応募した動機について

なぜ私は戯曲という演劇のテリトリーに音楽の譜面を放り込むのか。それに答えるにあたって、アントナン・アルトーを参照したい。アルトーは、観客を静観させるのではなく熱狂の中に巻き込む「生の演劇」を作るべき、という文脈の中で以下のように述べる。

「演劇を一つの言語のなかに固定すること、たとえば文字に書かれた言葉だとか音楽、光、効果音などの一つに限定することは、やがて演劇の喪失を招く」(『演劇とその分身』白水社 P17)

アルトーは演劇を名指してはいるものの、パフォーマンス・アーツ全般に当てはまるような鋭さを持つ一文である。上演を標本のようにして言葉や記号の支配下に置くことは、それが持つあらゆる可能性、まさに人間社会の枠組みからはみ出すような可能性のエネルギーを殺してしまうことに他ならない。アルトーの言葉を再度借用すれば、「生きている道具」を用いた上演による「行動する形而上学」こそが演劇、そして上演芸術の本質、すなわち「生に触れる」瞬間を生むのであって、戯曲や譜面はその為の道標と踏石に過ぎないのだ。

そのような認識に基づいて、私は「演劇」「音楽」という分類以前の状態を取り戻したいと考えている。ゆえに、私は自作の音楽の譜面で、この戯曲賞に応募することにした。ちなみに、A4、200枚程度という応募要項であったが、複数のモニターによると私の作品の上演時間は40分程度ということだったので問題ないと思う。

#### ◆作品概要

私は音楽を「緊張と弛緩による時空間の構成-Composition-」と定義し、実践してきた。時空間の構成を媒体にして演者の、そして観衆の主観的な認識の中に音楽という感覚を熾すこと、それは唯識論の音楽観であり、私個人のスートメントの骨子でもある。

今回の応募作“kq(ケーキュー)”もその一環にある。マイクで拡張された演者の呼吸音が大半を占め、加えて多少の道具を用いて時空間の構成を試みている。呼吸という多くの人にとって自明な運動をモチーフとして選んだ理由は、ある程度静かで落ち着ける環境ならば「誰でも」「どこでも」上演が可能という汎用性を目指してのことである。

とはいえ、上演のハードルが低い訳ではない。演者はマイクで拡張された自身の長い呼吸に自ら耳を傾けることで、ある種の緊張と集中を強いられる。と同時に、力まずに様々な形の呼吸と変化が指示されており、心身を弛緩させなければ演奏できないことが設計されている。また、各セクション内での変化、次のセクションへの進行のタイミングは演者に委ねられており、「ひとつひとつの音をよく味わうこと」「十分に味わったら」などの簡潔なディレクションがあるだけである。これは、演者が常に自身の主観を観察し、音楽を主体的に実感しながらでなければ演奏が、ひいては観衆の認識に音楽が、成立し得ないという私の音楽観の反映である。ゆえに、まず演者自身が「緊張と弛緩」を強いられることになっている。

では、その観衆の認識に音楽が成立するとはどういうことか。唯識論に基づけば、音楽は各々の主観的な認識の中にのみ存在し得るわけだが、演者の実感する絶え間ない意識と音の微細な変化は時空間に痕跡を残し、そこに繊細なグラデーションで彩りを付ける。一方で、音楽的話法の活用、たとえば、グルーヴとアクセント(最後段で詳述)、また、(2)と(5)は指示が同内容で「主題」を思わせる、且つ(4)での「テンション」を「解決」というような音楽的構造、それらが相まって演者と同様に観衆にも「緊張と弛緩」を促す。観衆がこの時空間に心身を委ねる時、それは静かな熱狂に没入させる契機になる。そのような、ある方向性は示しつつ個々の認識に委ねられる音楽の在り方は、ジョン・ケージから半世紀を経た、現代的なアプローチだと考える。

また、“kq”は呼吸音を軸にした音の上演ではあるが、各セクションのサブタイトルとして書かれた、「闇と種子」「開／閉」「内部と外部の邂逅」などのテーマを盛り込んだ一筋の物語が、作品構成の背骨となっている。パンフレットなどで観衆がそれを一読することで抽象的で非言語的な「演劇」としても受容できる射程範囲を備えている。

最後に、呼吸音の反復による構成に私がどのような工夫を加えているか述べたい。持論だが、音の反復が単調に感じられる＝音楽として認識されないことを回避する為の要素が二つ挙げられる。グルーヴとアクセントである。グルーヴは、音による心身への直接的な作用と定義を拡張して捉えることで、呼吸音の反復にも、雅楽やジャワのガムランのような緩慢で鷹揚なグルーヴが常に潜んでいる。そのグルーヴに身を浸すことで、いつの間にか演者、観衆の心身は沈静し深淵への指向へと絡め取られる。それとは反対に、アクセントは、細やかな、しかし端的な音の挿入がいくつかの道具によって指示されている。どれも日常的でありふれた道具と音に過ぎない。が、その緩慢なグルーヴの中では、それらは異物として唐突かつ鮮烈に響き、観衆の耳に新鮮な驚きをもたらすことが想定されている。

以上のような「緊張と弛緩による時空間の構成」によって演者と観衆とが静かな熱狂に没入する時、各々の認識には「音楽」だけでなく、「生の演劇」が立ち昇ってくるのではないか。(規定の枚数をオーバーしそうなので端的に終える)

## 使用機材・道具

マイク(SURE SM58)

メトロノーム(スマホアプリ”Smart Metronome & Tuner”無料版を使用)

チンチロリン(小粒のビーズ3-4個と陶器製茶碗)

スーパーボール5個

## Direction

- ・自分の呼吸音に耳を傾けること  
ひとつひとつの音をよく味わい、同時に自分の意識を静かに観察すること
- ・リップノイズや呼吸音の震え、うまく呼吸できなかった時は受け流す  
ただし呼吸音の震えは無駄な力みだと自覚すること
- ・母音の指示は口内と唇の形であり、発音はしない  
母音などの変化のタイミングは演者に委ねられる  
ただし、小石を一つずつ積むように丁寧さを心掛けること
- ・収まりが悪く感じる時、単調さに陥った時は、なるべく長く呼吸をし、  
意図的に変化のタイミングを変えてみると良い
- ・心地良い場所を見つけたら飽きるまで留まっても良い
- ・十分に味わえたと思ったら次に進む

(1) 序

目を閉じて

あなたが もっとも心地よい 暗闇に

包まれている と 空想する

BPM:8、4／4でメトロノーム(以下M)を鳴らす  
(呼吸を合わせる必要はない)

16回(4小節)M聞く

・  
・  
・

M聞きながら

細く長く呼吸する

以降、常にマイクに呼吸音を吹き込み続ける

最初から強く呼吸しようとしないうこと

脱力し、身体が整うまで繰り返す

(2) 胚胎

種子が ひとつ

あなたの肚で 胎動している

こと を

感じる

M止め、

吸う:A、吐く:O から始める

・

・

徐々に

吸う:UA、吐く:UOに変化する

・

・

・

呼吸を止め

チンチロリン

一回投げる

(3) 外界

異なる 濃さ の 間が  
あなたの暗闇の外側に  
存在 している こと  
を  
感じる

吸う:U、吐く:I

・  
・  
・  
・  
・

柔らかい響き、鋭い響きへの変化をつけてみて味わう

(4) 危

二つの 間の

境界で

不 安定な 状態に 身 を 置く

その不安定さ が

自身の 輪郭を

濃くさせる

「つ」「ふ」で吸い

「ち」「は」で吐く

短く、疾く、しかし強くならないように

吸うを複数回、吐くを複数回続けるなどの遊びがあってもよい

自分の意識から外れる瞬間、隙を突いて呼吸する

・  
・  
・

息継ぎとして「は一」と長く呼吸することもできる

(5) 安定

あなたの 暗闇に戻り

種子の 温もりを

感じる

吸う:A、吐く:O から始める  
身体の緊張をありのままに受け止める

・

・

・

徐々に

吸う:UA、吐く:UOに変化する

・

・

呼吸を止め

チンチロリン

一回投げる

(6) 萌芽

外側の間 と 種子 と が

静かに 共鳴し

発芽して

細長い 細長い

茎が 伸びていく

吸う:U、吐く:I から始める

・  
・  
・  
・

徐々に

UI、IUを経て

・  
・

二つの母音が混ざる

(7) 離

伸びていく

茎が

あなたの 肚 を

離れ

外側の間に 向かって

漂って いく

(6)での呼吸を継続する

・  
・

呼吸を続けながら

スーパーボールを1つずつ、5回

なるべく高い位置から落とす

(8) 鎮

あなたの 暗闇 の中で

心身 を 鎮め

再び

閉じる

吸う:A、吐く:E

・

・

・

・

M再開、16回聞く

呼吸は続ける

・

・

M止め、吐く:Eで収める

(終わり)